

令和7年度 自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制（委員会・組織等）

国立音楽大学大学教育研究協議会

（責任者名）梅本実

（役職名）学長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	全専攻・専修の基礎科目（必修科目）として「AI・データサイエンス」を開講している。担当教員及び教務課員が履修状況と単位修得状況を把握している。オンデマンド形式で開講されており、専用学習システム、本学LMS、Google Classroom等を活用している。学生向けのシステム使用法の指導については、動画コンテンツを担当教員が作成している。学習管理システム上を用いて、履修者ごとに講義内容の進捗状況、課題やレポートに対する回答状況などの学習履歴を包括的に確認でき、担当教員は学習履歴を把握・分析し、課題の提出状況や小テストの成績を基に全受講者の学修状況の管理を行っている。2025年度履修する全学生278名のうち、256名（92%）が合格した。
学修成果	本学が導入している専用学習システムにおいて、本教育プログラムを構成する教材内の課題は自動採点され、提出状況を確認することができる。全15回の授業を期間を定めて配信しており、各授業で小テストを設けている。小テストは自動採点されるため、学生が自身の理解度を即時に把握できるようになっている。また、配信動画についても期間中は繰り返し閲覧することが可能となっているため、より理解を深めることができる。 また、単位取得状況等については、教務委員会に報告するとともに、大学教育研究協議会にて学修成果のさらなる向上に向けた施策の検討を行っている。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	学生が実施した課題の正答率を確認すると、2025年前期の結果で、平均で8割を超えている学生が67%を超えており、平均で6割を超えている学生が82%に達していた。さらに再履修者のみを対象とした2025年後期の実施より、8割を超えている学生が69%、6割を超えている学生が73%であった。再履修の学生においても、高い割合で内容を理解できていることから、本講義の内容は受講者には十分に理解されていると考えられる。さらに操作方法が不明な場合も、大学の教務課および担当教員に必要な応じて質問に来ており、学生の理解につながっていると考えられる。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	全学生への必修科目であるため、他の学生への推奨度に関する調査は設定していないが、学生からは、日頃より「自分の時間を最大限活用して学ぶことができる」「他の授業では聞かないような内容を学ぶことができる」といった声もあり、オンラインでの学びの長所を生かしつつ、学びを進めている様子がわかる。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	2024年度より新1年生全員が必修科目として受講しており、また不合格となった場合は次セメスターに再履修するため、履修者数は100%の状態を保っている。さらに次年度以降も全入学生の必修科目としているため、今後も履修率100%を保った運営を継続する。
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本教育プログラムは令和6（2024）年度に開講し、1学年の必修科目として履修をさせている。そのため、現時点で、本教育プログラム修了者はまだ在学中である。今後の取組みとして、キャリアを担当している学生支援課と連携しながら本教育プログラム修了者に対して、学修内容をどのように活用し、どのように社会で役立てているか等、個別にアンケート調査を実施し、その結果を今後のプログラム内容の改善に役立てる予定である。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	教育プログラムは、すでに複数の大学で実績のあるオンラインコンテンツを利用している。このコンテンツでは、実社会の現状に応じた内容が組み込まれており、また、各回の動画コンテンツはさらに短い複数の動画から構成されており、効率よく学ぶことができるように工夫されている。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	授業が始まる前の新入生オリエンテーション時に、「AI・データサイエンス」を学ぶ意義や目的を動画で伝え、視聴させることで意義を伝えている。また、Google Classroomを通じて定期的に学ぶ意義を伝えることで、学生の学ぶ意欲を向上させる努力をしている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	授業に用いている授業コンテンツは毎年内容の一部を見直ししながら構築されている。社会の変動やニーズを踏まえた変更を行なうことで、受講者の学びの質を向上させている。